

ジャンボタニシの防除薬剤について

JAグループ和歌山農業振興センター 技術参与 本田 孝志

【はじめに】

ジャンボタニシ(正式名称:スクミリンゴガイ)は田植え後の稲を食害し、その後の生育に大きな影響を及ぼします。南米原産の貝で、冬の寒さにはあまり強くありません。今年の冬は比較的寒い日が多かったので越冬貝の数が少ないと良いのですが、油断は禁物です。

今回は昨年行ったジャンボタニシ薬剤試験の結果を中心に、防除対策について紹介します。なお、ジャンボタニシの生育特性等は「令和3年11月の営農情報」で紹介しましたので省略させていただきます。



ジャンボタニシの被害田

【試験の概要】

令和4年6月に、日高町の水田でJA紀州の担当者と協力して試験を実施しました。いくつかの薬剤を供試しましたが、今回は「メタアルデヒド」を含有する薬剤の結果について紹介したいと思います。なお、田植えは6月15日です。

◎試験農薬

〈スクミノン〉

メタアルデヒド10%

10a当たりの散布量は1~4kg

〈ジャンボたにしくん〉

メタアルデヒド5%

10a当たりの散布量は1~2kg



ジャンボたにしくん スクミノン



◎試験区 (1区: 1.8m×1.8m)

- ①スクミノン 2kg/10a
- ②ジャンボたにしくん 2kg/10a
- ③無処理(農薬なし)

6月30日、各区にジャンボタニシ18個を投入後、各農薬を散布

【調査結果】

7月4日調査

※面積換算して農薬を散布

試験区	生存率	卵塊数
スクミノン 2kg/10a	6%	2個
ジャンボたにしくん 2kg/10a	5%	0個
無処理	83%	22個



ひしゃくを使うと、
田の中央部まで薬
剤が届きやすい

○スクミノン及びジャンボたにしくんを散布すると、ジャンボタニシはほとんど死滅した。極少量の生存貝もほとんど動かなかった。また、卵塊も極少量であった。

○無処理区はほとんどの貝が生存し、動きも活発であった。また、産卵数も多かった。

【面積を拡大して再試験】

7月8日に各試験区的面積を100㎡に拡大して再試験を行った。

○上記の結果と同様に、スクミノンまたはジャンボたにしくんを散布すると、ほとんどのタニシは死滅した。

○しかし、この試験では仕切りをしないで行ったため、数日後には無散布の場所からタニシが移動してきた。



スクミノンを食べるジャンボタニシ

【農薬の効果】

- ・スクミノンは誘因効果があり、薬剤の近くにいるタニシは寄ってくる
- ・ジャンボたにしくんは粒数が多いのでタニシが食べる確率が高くなる
- ・いずれの剤も水に溶けて効果が発現するのではなく、剤を食べると貝が死滅する
- ・散布後の日数が経過すると剤の効果が低下する

【田植え後の管理のポイント】

◎ジャンボタニシの多い水田は
浅水で管理する

◎薬剤は田の周辺だけでなく、
田全体に散布すると効果が高い